

出雲臣の遠祖天穗日命神社の鎮座地

—『出雲国風土記』からみた—

名誉教授 大谷 光男

一、はじめに

『日本書紀』の記載が事実であれば、地方神祇官としての出雲国造は斉明天皇五年（六五九）まで遡ることができる。記事には「是歳、出雲国造に命じて^{イツクカミ}厳神の宮を修す。……於^{オウ}宇郡^①」（原・漢文）とある。於（意）宇郡とあれば熊野大社のことである。意宇郡の誕生は文武天皇二年（六七三）とみる。厳神は『古事記』に「伊都久神」と多く用られ、特例はない。宣長の『古事記伝』六之巻には、「以伊都久神、記中此語多し」とある。

しかし、養老神祇令の義解（天長十年（八三三）完成）には、

謂、天神者、伊勢、山城鴨、住吉、出雲国造^{イツクカミ}齋神等類是也。地祇者、大神、大倭、葛木鴨、出雲大汝神等類是也。^{ナムチ}

とあつて、神社には天神と地祇とに分類している。出雲国造が齋神の神社は意宇郡の熊野大社^②で、天神に属する。一方、出雲大汝神（記に大穴牟遲命、紀に大己貴神^{（命）}）を祀る神社は出雲郡の杵築大社^③で、地祇である。なお、『日本書紀』神代上の巻頭の注には、

至貴曰^レ尊、自余曰^レ命 並^ニ訓^ニ美^ミ等^{コト}也。下皆倣^レ之。

とあつて、熊野大社の祭神は素戔鳴尊（「出雲国造神賀詞」には加^カ天^ツ呂^ロ伎^キ〈天神〉櫛御氣野命）、杵築大社の祭神は大己貴命（神代上、宝剣出現初出）とあるのも、右の注書に従つてのことであろうし、天神は地祇の上位にあることを示している。

熊野大社と杵築大社を斎き奉る出雲臣は出雲の地名を冠しての出雲臣で、『日本書紀』崇神天皇六十年七月が初見とみるべき。また両大社の奉仕も、臣姓を賜わる頃には始められていたように記されている。^④ 出雲臣と同じく、臣姓で地名に冠して豪族といわれる氏を挙げれば左のごとくであるが、彼等は天武天皇十三年（六三四）十一月朔に、「八色^{ヤクサ}之姓」に倣つて、臣姓から朝臣姓に改められた。

大春日臣、波多臣、大宅臣、粟田臣、小墾田臣、桜井臣、岸田臣、下道臣、伊賀臣、阿閉臣、

ところで、この小稿は畏友渡部義任氏（東京大学経済学部卒、同大学院を経て、フランスに留学）が、在仏中に日本の神話に興味をもち、同学（経済学）から文化人類学に転向した大林^{たりにょう}太良氏に對抗して研究を纏めたのが、著書『神代史発掘』上・下巻である。^⑤ 氏は予定より長く在仏し、帰国後は優れた語学を駆使して諸事業に参加して功を挙げ、しかも多忙な事業の合間に、日本神話の問題を提起して、疑問を問い掛けたのが本書の特色であつて、筆者は左の問題に惹^ひかれて小稿を起すことにしたのである。それは氏の上巻「第三編 国造広嶋と出雲国風土記」の稿中に、

まず、当然出てきていいはずの天穗日命と天夷鳥命を祀る社が一見したところ、どこにも出てきません。……実はこの二神を祀る神社は東隣の伯耆国に多いので、こっそり移し、祖先を守ることに専念する両族を移住させていたとも考えられます（五八頁）。

とあつて、『出雲国風土記』を見渡したところ、天穗日命と、その子孫である天夷鳥命を祀る神社の存在がないことを渡部氏が指摘している。

二、出雲臣の祖と出雲国造の祖

天穗日命アマノホヒノミコは、『日本書紀』神代上、第七段の一書に「天穗日命、此ノ出雲臣、武蔵国造、土師連等ノ遠祖也」とあり、出雲国造は『先代旧事本紀』国造本紀に、

出雲国造。瑞籬朝御世ミズガキノミコ（崇神）^一、以天穗日命ノ十一世孫・宇迦都久奴命ウカツクヌノミコヲ、定賜国造^二。

とあるが、『新撰姓氏録』右京神別上、天孫には、

出雲臣。天穗日命十二世孫、鵜濡淳命ウガツクヌノミコ之後也。

とあり、また同書、河内国神別、天孫には、

出雲臣。天穗日命十二世孫、宇賀都久野命ウカツクヌノミコ之後也。

とあり、『日本書紀』崇神天皇六十年七月の条に、鵜濡淳ウガツクヌとあるのは、姓氏録の鵜濡淳命と同名であろう。『先代旧事記』によれば、宇迦都久奴命が出雲国造の初代に就いたことになる。

ところで、出雲国造の祖は『古事記』上巻の天安河の誓約の後に、「故、所生五柱子之中、天菩比命之子、建比良鳥命タケヒラトリノミコ、此出雲国造……等祖也」とあるが、『日本書紀』には、崇神天皇六十年七月の条に「武日照命テルノミコ、一云。武夷鳥ヒナ、又云。天夷鳥アメヒナ……出雲臣之遠祖出雲振根」とあつて、出雲国造の祖についての記述はない。天穗日命については、紀の神代上の瑞珠盟約の個所に「是出雲臣、土師連等祖也」とある。

『古事記』に、建比良鳥命（紀に武夷鳥）が出雲国造の祖とあるのは、宣長の『古事記伝』十二之巻に「建比良鳥命が高天原から出雲に降て大国主神の祀を主ツカサドる」ことを行ったからであろうという。何はともあれ、紀によれば、出雲臣の祖は、天穗

日命の外に、出雲振根の両説があつたが、出雲振根のばあいは、振根に至つて始めて出雲が冠せられたことによつて祖と呼ばれたのであろう。

天穂日命は天照大神と素戔鳴尊との誓約（記は宇気比^{ウケヒ}）の際に生れた六神（紀）、記には五神、の神として高天原から葦原中国を平定のため、中つ国に派遣されたが、大己貴神（記は天国主神）に媚び付いて、三年を経ても復奏しなかつた（記）。しかし「出雲国造神賀詞（祝詞）^⑥」によれば「返事申給久（かへりごと申したまはく）と、布都怒志命（紀・経津主神）らの大八島国での功績を称え、返事^{カヘリゴト}の神賀の古詞^{ヨゴト}を奏している。しかし、同じく祝詞の「遷^{ウツ}却崇神^{タタリカミ}」（崇神を遷し却る^{ウツヤ}）には、天穂日命を遣はして平けむと申しき。こをもちて天降し遣はす時に、この神は返事^{カヘリゴト}申さざりき（原・漢文）^⑦。

出雲国造は、『日本書紀』では斉明天皇五年にのみ記されており、その存在は上古まで遡らない。『続日本紀』文武天皇大宝二年（七〇二）四月庚戌の条に「詔、定^ニ諸国々造之氏^ニ、其名具^ニ国造記^ニ」とあるが、当時の「国造記」が現存していないので、具体的に国造の上古に関しては把握できていない。

三、出雲国風土記の成立

『出雲国風土記』は天平五年（七三三）二月廿日^⑧に、出雲国造である出雲臣広嶋が責任者で、補助は秋鹿郡の神宅臣全太理が当り、さらに各郡の撰者をも交えて勘造して、太政官に提出した報告書である^⑨。出雲国内の各郡の撰者は無位の者もいるが、地方官としての役職を有する者が担当している。各郡の撰者には、出雲臣が目立つが、熊野大社があり、国引き神話のある意宇郡は、撰者五人のうち三名が出雲臣で占めている^⑩。しかも大郡のためか、郡の主帳^{サカン}の二名（海臣と出雲臣）が参加しており、各郡でも同様に筆録を担当している。地方の下級官吏のためか、位階・勲等はなく无位^{ムイ}である。また申すまでもなく、意宇郡

の大領出雲臣広嶋が、当風土記の總責任者である。

一方の杵築大社（出雲大社）がある出雲郡の撰者には、四人のうち一人も出雲臣の参加者がいない。左のごとくである。

郡司	主帳	无位	若倭部臣
大領	外正八位下	日置臣	
少領	外従八位下	太 臣	
主政	外大初位下	口 ^カ 部臣	

右の位階を意宇郡と比較すると、全てにあたって出雲郡は低く、熊野大社は杵築大社より高く評価されていたことになる。天神と地祇の差というものであろうか。

『続日本紀』をみると、天平年中の出雲郡には出雲臣の者が見えず、天平十八年（七四六）三月己未の条に「外従七位下出雲臣弟山授^{オトヤマ}外従六位下」とある弟山は、正倉院文書「出雲国計会帳」九月二二日に、「飯石郷少領外従八位上出雲臣弟山」であって、天平五年の『出雲国風土記』にみえる飯石郡少領という^①。その他には、正倉院文書「謹解 申貢優婆塞事」の天平十五年正月八日に、出雲郡漆沼郷の戸主・出雲臣大國が、同じく同文書で、天平十一年「出雲国大（正）税賑給歴名帳」の出雲郷朝妻里に戸主・出雲積麻呂が、さらに朝妻里に戸主・出雲積首麻呂がみえ、また伊知里には戸主・出雲積広麻呂が記載されている。出雲国は当時すでに貧困者・病人などに救助策を施していた。若しこの「積」・「積首」などが出雲氏の古代の姓として伝えられてきたとすれば、出雲臣の姓は比較的に新しく授けられたものと解せられる。天武天皇十三年（六八四）の八色之姓に改められた時に、出雲臣が朝臣を賜わらなかったのも、右のような事情であったのかと推察される。

さて、『出雲国風土記』は元明天皇和銅六年（七二三）五月甲子、諸国の風土記編編の詔を受けて、太政官から発せられ、作業に就いたはずであるが、完成の提出期限を決めていないように判断される。その理由は『出雲国風土記』の勘造による太政官への提出は、天平五年二月であり、実に和銅六年から二十年を要している。おそらく勘造に至るまで再三変更していると

思われる。出雲国のばあいは勘造者が国造であるので、自然のこと、国内の神社に注目することになる。

出雲国の神社の總数は三九九社という数である。内訳は一八四社が神祇官の認可、二一五社が不認可である。神祇官によって認可された神社は一般に官社と呼ばれている。平城天皇大同二年（八〇七）の齋部広成『古語拾遺』の文中に、^⑫

天平年中に至りて、神帳を勘造する。中臣は権を専^{モツバラ}にして、意に任せて取り捨つ。由有る者は、少祀も皆列る。縁无き者は、大社も猶廢さる。……諸社の封税は総て一門に入る（原・漢文）。

右の記録によつて、天平年中に、神社は官社と、非官社とに分類された神名帳が造られたと伝える。官社の語は『続日本紀』光仁天皇宝龜三年（七七二）八月甲寅の条に初見。また神祇伯は中臣氏が天平十三年まで（長官を）独占しており、広成の訴えも事実存在していたのであろう。次いで『出雲国風土記』九郡の（A）官社、（B）非官社、（C）延喜式神名帳（延長五年〈九二七〉に完成）の官社数を表にして左に掲げた。（A）との増減は備考に記した。（B）の非官社数には疑問あり。

左の出雲国九郡の神社数をみると、杵築大社がある出雲郡が五八社（官社）、熊野大社がある意宇郡が四八社（官社）と、他郡と比較して圧倒的に神社の数が多い。神祇官による官社の合格率は、出雲郡が五割に充たない。意宇郡が七割、また各郡の官社数は延喜式の神名帳下と比べると、神門郡が二社減で、官社の数には変化がない。しかし神名帳と社名を比べると、社名が変更されているようにみえる神社が多い。

出雲国九郡は神名帳では、能義郡を加えて十郡に改められている。その新規の能義郡には天穗日命神社の「一座小社」が設けられている。能義郡の設置は正史にみえず、『和名類聚抄』（源順編）が初見で、成立は承平年中（九三一―九三八）であるという。郷は十郷で「舍人、安来、楯縫、口継（風土記不載）、屋代、山国、母理、野城、賀茂、神戸」の順に記す。なお内訳は、意宇郡から屋代、安来、山国、舍人、母里、加茂、野城、神戸郷の八郷が、楯縫郷は伯耆国（会見郡・日野郡）から、口継郷は増設郷か、風土記不載である。^⑬意宇郡屋代郷には神社名がみえないが、天穗日命の社が鎮座しているらしく、「郡家 正東廿九里一百廿歩、天乃夫比命御伴、天降来坐、伊支等之遠祖、天津子命詔、吾靜將^{ヤシロ}坐志社詔 故云^{アメノフヒ}社」とあり、天夫比命は

天穂日命であろう。『古事記伝』七之巻にも同様に解している。能義郡の誕生は西暦九三〇年代のことで、建郡によって天穂日神社が「小社」として誕生し、官社となった。意宇郡内の出雲臣が集団で能義郡に移住しての天穂日命神社の創建と考えられる。

『出雲国風土記』の神社数

郡 名	(A)	(B)	(C)	備考(A-C)
意 宇	48	19	48	0
嶋 根	14	45	14	0
秋 鹿	10	16	10	0
楯 縫	9	19	9	0
出 雲	58	64	58	0
神 門	25	12	27	2 減
飯 石	5	10	5	0
仁 多	2	8	2	0
大 原	13	16	13	0
計	184	215 (209)	186	2 増

注 (B) は実数に疑問あり。

四、天穗日命と出雲臣

さきに、養老神祇令の義解に触れ、天神の大社と、地祇の大社を掲げ、その一例として、熊野大社（天神）側の神社と、杵築大社（地祇）側の神社では、官舎の合格率からみても熊野大社の方が杵築大社の上位に置かれていることが分る。前者は同じ出雲臣にして国造系の出雲臣である。『古事記』によると、天神と地祇を定めたのは、崇神天皇の時代とある。しかるに、嵯峨天皇弘仁六年（八一五）七月廿日に奉進した『新撰姓氏録』の録序によると、「天神・地祇之胃、謂_二之神別_一、天皇々（皇子派、謂_二之皇別_一、大漢三韓之族、謂_二之諸蕃_一」とあり、平安朝の初期には、天神・地祇の別は解消、ともに神別としたとある。ところで、出雲国の熊野大社は、祝詞「出雲国造神賀詞」の詞にあるように、出雲臣の遠祖天穗比（日）命・兒の天夷鳥の系譜の者が出雲国造となり、熊野大神（神社）で櫛御氣命（素戔鳴尊）、そして出雲国を造った大穴持命（大己貴命）の二柱をはじめ、神がみを祀り、神がみからは斎いの返事の神賀の古訓を賜わりて、今日この国造としての神賀詞を奏上することができたという。当初、熊野大社は「大己貴命など神がみを合祀する予定であつたのであろうか。その反論は『日本書紀』神代下、天孫降臨の一書に、

時に高皇産靈尊は経主神・武甕槌神に勅して曰く、……汝（大己貴命）が住むべき天日隅宮供造ること……柱は高く太し、板は広く厚くせむ……又、汝が祭祀を主るは、天穗日命、是れなり（原・漢文）。

とあり、杵築大社は天穗日命、すなわち出雲臣が祭祀すべきことが記されている。『古事記』上巻には、前述のように、出雲国造は天菩比命（天穗日命）の子、建比良鳥命（武夷鳥命・又は天夷鳥命）と記されており、この史料から判断すると、武夷鳥命（天夷鳥命）系、すなわち出雲国造系の出雲臣と、天穗日命系の出雲臣の二系統の存在が推測される。

そこで天穗日命の諸系譜を『新撰姓氏録』から探ると、左の資料を得ることができた。

- (1) 右京神別上、天孫、出雲臣 天穗日命十二世孫、鵜瀦淳命ウガツクス之後也(前掲)。
- (2) 左京神別中 天孫 出雲宿祢 天穗日命子、天夷鳥命之後也。
- (3) 左京神別中 天孫 出雲 天穗日命五世孫、久志和都命之後也。
- (4) 山城国神別 天孫 出雲臣 天穗日命(同神)子、天日名鳥命之後也。
- (5) 山城国神別 天孫 出雲臣 天穗日命之後也。
- (6) 河内国神別 天孫 出雲臣 天穗日命十二世孫、宇賀都野命之後也。(前掲)

右の資料でみる限り、『新撰姓氏録』は、氏族と神社との結び付きである天神と地祇を解消して神別で統一したが、皇室からみた氏族に対しては、皇別と神別(天神・天孫・地神)に分け、出雲臣・出雲宿祢は神別天孫の部に属することになった。また諸蕃の氏族についても、漢・百濟・新羅・高麗・任那などの国別に支配関係を固めたといえよう。

ところで、天穗日命の系譜の同姓氏族は時代が下るに従って、集団で居所を移動したように見受けられる。右の資料(1)に対応するものに『先代旧事記』の国造本紀がある。出雲国造は左のごとくである。

瑞籬朝御世(崇神)、以^二天穗日命十一世孫、宇迦都久奴命^{ウカツクヌ}、定^二賜国造^一(前掲)。

この国造本紀によって、(1) 右京神別上の出雲臣と、(6) の河内国神別の出雲臣は、国造本紀が事実を伝えておれば、意宇郡から右京・河内国に移住したことになる。(2) は『古事記』上巻に「天菩比命之子、建比良鳥命、此出雲国造等祖也」(前掲)とあるので、同様に意宇郡から左京に移住したことになる。史料にみえる出雲宿祢は、『続日本紀』延暦十年(七九二)九月丁未が初見であるので、出雲宿祢の左京進出は延暦十年以後とみられる。(3) の久志和都命は記紀にみえず、武蔵国造系図に文字も等しく載せているが、他に比較する資料がない。出雲臣とはなく、出雲とのみあるのは不審である。(4) は天日名鳥命とあれば、国造の意宇郡の出雲臣が山城国に移住したものと考えられる。山城国には愛宕郡オタギ(京都市)出雲郷が設けられ、

神龜三年（七二六）には出雲郷雲上里・雲下里に分れるほどの人口増であった。『式内社の研究』を著わした志賀剛氏によると、出雲郷上・下は、神龜三年『山背国愛宕郡雲上里・雲下里の両計帳』（正倉院文書）の地域に当るとい¹⁵う。

さて、意宇郡の出雲臣は宿祢の称号を得ても、京にむかつて進出し、同じく山城国愛宕郡には出雲井於神社（祭神・素戔鳴尊）、宇治郡に天穗日命社を設けるまでになっている（京都市伏見区）。

出雲臣から出雲宿祢に陞^{ノボ}る格差は、天武天皇十三年（六八四）十月己卯朔の詔による、一に真人、二に朝臣、三に宿祢、四に忌寸、五に道師、六に臣、七に連、八に稻置。八色之姓から比較すると、「宿祢↓忌寸↓道師↓臣」と、四段階を一挙に上ったことになる。八色の姓の主旨は氏族に順位を付け、社会を安定化させることであつたが、出雲臣という優れた豪族を、天武十三年に陞進させなかつた理由は、臣の姓を授かつたのが他の氏族より比較的に新しいこと、また出雲臣の内部が熊野大社系と、杵築大社系とに分裂していたことによると推察される。

左は『八色之姓』施行から百年を越した史料で、出雲臣から出雲宿祢を希^{コイネガ}う歎願書である。『続日本紀』延暦十年九月丁丑（十九日）、申請者は出雲臣祖人近衛將監^{シヤウケム}で、官位は正六位下である。¹⁶

出雲臣祖人申す。臣等の本系は天穗日命より出づ。その天穗日命十四世の孫を野見宿祢と曰う。野見宿祢の後、土師氏^{ハジウジ}の人等、或は宿祢となり、或は朝臣を賜う。臣等同く一祖の後を為して、独り均養の仁に漏れたり。伏して望むらく、彼の宿祢の族と与に、同じく姓を改ずるの例に預らんと。是に於て、姓を宿祢を賜う（原・漢文）。

なるほど、土師連は天武十三年十二月戊寅朔己卯の日に、宿祢を授けられている。ところが出雲臣は『続日本紀』文武天皇大宝二年（七〇二）九月乙酉の条に「従五位下出雲伯賜臣姓」とあつて、『日本書紀』天武十三年（六八四）の八色之姓を施行した一八年後になつても、第八位の臣姓を伯に授けていることである。実はこの伯と、紀の天武天皇元年（六七二）七月の条にみえる伯は、出雲臣伯とあり、同一人物とすれば矛盾がある。なお不思議なことが続く。天平十八年（七四六）四月癸卯に、出雲臣屋麻呂が外従五位下に任ぜられ、翌十九年六月辛亥に、外従五位下出雲屋麻呂に臣の姓を授けているなど、理解

に苦しむ。無姓の者に、姓を授ける、事実が存在したことを否定できない資料である。

出雲臣を出雲宿祢に昇格を認めたのは土師宿祢の存在ばかりでなく、その背景には、『公卿補任』で理解できるように、光仁天皇宝亀十二年（七八二）から、公卿氏名の姓が記載されなくなった事情によるものと判断できまいか。同十一年の補任（官位記）には、大伴宿祢家持の一人が宿祢の姓を用いているが、同十二年には宿祢を取除いている。延暦年号の桓武天皇の時代をむかえると、姓の効用は低下し、申請により姓の陞進が容易になったと見受けられる。朝臣（姓）は延臣の自他の称として残存する。

なお『出雲国風土記』を勘進した出雲臣広嶋は国造であり、意宇郡の大領（長官）である。選叙令によると、大領の位階は外従八位上、少領は外従八位下が授けられ、さらに義解に、（注意・国造に国造とルビあり国史大系本）

其の大領、少領は才用が同くば、先づ国造を取れ。謂。見て国造と為す者を取らば、神祇令に即い、国造は馬一疋を出せ。是れ也。

とある。郡司の選抜は国司が銓衡して、式部省において決定、太政官が任命するのが一般的であった。その国造の採用は神祇官の職域であるが、出雲国の国造のばあいは、『類聚三代格』卷七「郡司事」の項目で知ることができる。すなわち、桓武天皇延暦十七年（七九八）三月廿九日付の太政官符の伝達「応仁^⑬出雲国意宇郡大領^⑭事」で、大納言從三位神王（榎井親王の子）が宣旨、文中に、

昔者国造・郡領職員有^⑮別。各守^⑯其任、不^⑰敢違越、慶雲三年（七〇六）以来、令^⑱国造帶^⑲郡大領。

とある。すなわち、文武天皇の慶雲三年以降から、出雲国造が大領を兼帯することになり、出雲臣広嶋が天平五年に国造と意宇郡大領であったことが納得できる。この事実は、初伝とされる元正天皇靈龜二年（七二六）二月丁巳の出雲臣による「神賀事」を奏する儀式がさらに遡ることを暗示する。

ところが、神祇官が出雲国造の身边を調査したところ、同じく太政官符を通じて、同年十月十一日に、右大臣（神王）より「出

雲国造、神事を託^{タケ}して、多く百姓の女子を娶り、妻と為^ナすことを禁ずる⁽¹⁹⁾（原・漢文）という禁令が発せられている。おそらく、この期を境にして、国造と大領との兼帯を分離したと考えられる。宗像神社では延暦十九年十二月四日の太政官符によって分離した。

出雲臣の官吏は地方官であつたので、一般に官位は外位であつた。また出雲氏が臣姓から宿祢姓に自動的に昇進しなかつた理由は、一つに臣姓の賜姓が「八色之姓」の授与に近いという推測だけでなく、伝承として『日本書紀』崇神天皇六十年の条に、出雲臣の遠祖出雲振根^{フルネ}を、朝廷が吉備津彦を遣わして誅したので、出雲臣が畏れて、暫く大社（杵築〔出雲〕大社）を祭らずとある。この記述は事件の類型であろうが、出雲氏を揺^{ユル}がす事件があつたと推察できる。

『出雲国風土記』をみても、出雲臣の祖という天穂日命、国造の祖という天夷鳥^{トトリ}（紀）を単独で祀る神社がない。朝廷に遠慮しての策であろうか。両大社の祭神としても祀られていない。能義郡^{ノギ}の天穂日命神社は前述のとおり延喜神名帳で現われる。神名帳の出雲郡には阿須伎神社の分社として「阿麻能比奈等理神社^{アマノヒナトリ}」が、同帳の神門郡^{カム}には「塩冶日子命御子焼大刀天穂日子^{シヨヤヒコ}命神社」がある。神門郡は神名帳で二社（官社）が増加している。天平年間とは神社名が改められたこともあるが、資料不足である。

出雲国の東隣りに伯耆国を越えて因幡国があつて、高草郡（現・鳥取市の西半分の地域）には、延喜神名帳によれば、天穂日命神社、天日名鳥命神社、大野見宿祢^{ノミ}の三社が当研究に当る（七社のうち）。この事実は、出雲臣が高草郡に逸早く分布していたか、ないしは集団で出雲国から移住してきたことを証しまいか。出雲国の意宇郡を削くようにして能義郡を設けて、天穂日命神社を祀った年代と建郡とを比較することは困難であるが、若し神社の神位の授与の年代が決め手となるということになれば、能義郡の天穂日命神社が仁寿元年（八五二）九月に従五位下を、ついで天安元年（八五七）に官社を授⁽²⁰⁾り、因幡国の高草郡の大野見宿祢神社が貞観八年（八六六）十月に従五位下、天穂日命神社が同九年五月に正三位を授⁽²¹⁾り、官社に列している。右の論法にしたがえば、能義郡の方にまず移住したことになる。天日名鳥命神社の神位は不明であるが、同じく貞観八・九年

であろう。

蛇足であるが、神社の神位（神階）は名誉にすぎないが、諸司（中央）・諸国の国司の申請によって陣定の座で決るが、諸国は官符で通達され、官社は神祇官によって神名帳に登録される。

なお、大国主命と東に伯耆国を越えて、因幡国の高草郡（記は気多郡とする）との関係を表わす挿話は、『因幡国風土記』逸文の「因幡の白兔」が有名である。この説話は『古事記』上巻の大穴牟遲神（大己貴神）と素戔の物語が原型と伝えるが、松村武雄氏によると、この挿話には、日本自生説と南国伝来説があつて、日本自生説を代表する学者は、「漢委奴国王」金印研究などで有名な言語学者中島利一郎氏で、「ウサギ」を朝鮮では「ヲサギ」と発音することから、朝鮮からの民族移動を暗示してまいいか、という説⁽²²⁾に対して、松村氏はこの種の説話の類型には、東印度諸島、印度本土、セイロン島に互つて広く伝来されているという。医薬療の伝承として、大国主命を扱っている研究は見当らない。平安時代の貞観十二年（八七〇）に卒した、有名な左京人出雲朝臣峯（岑）嗣は『三代実録』に、その伝記が掲げられているほどの学者で、勅令による諸名医とともに医書『金蘭方』^{キンランボウ}を著わしている。今日、数冊が平安時代の字本とみられる欠本が宮内庁書陵部が蔵している。峯嗣の伝記中の、貞観十年に「改出雲姓^{ミヨウジン}為菅原^{ミヨウジン}、以土師・出雲同祖也」とあり、出雲姓と菅原姓は系図上、同祖（天穂日命）なので菅原姓に改めたとある。とあれば峯嗣は出雲国から左京に移住した人物で、父出雲朝臣広貞は左京人、延暦二十四年（八〇五）年正月に「正六位上出雲連広貞、外従五位下、以供奉御薬、昼夜不怠也」（『日本後紀』）とあり、出雲臣の出身ではなく、出雲連の出身であつて、弘仁三年（八一二）年六月に宿祢の姓を賜わり、大同三年（八〇八）の『大同類聚方』の出雲本を伝えた出雲宿祢貞俊も広貞の身内であろう。この節で述べたかったのは、出雲連の存在と、医道に出雲氏の活躍があり、貞観年中には出雲臣の豪族としての勢力が衰微していたが、医道の方で、出雲連等の医学上の発展があつたことを記しておく。

さて、本論に戻つて、三社の神位の比較である。（１）意宇郡の熊野大社、（２）出雲郡の杵築大社、（３）因幡国の高草郡

の天穗日命神社との神位を比べると、左のごとくである。

- (1) 意宇郡の熊野大社は旧国幣大社で、延喜神名帳には「熊野坐神社大神」とあって、すでに熊野大社とはない。神位の初見は仁寿元年（八五二）九月乙酉の条に「特擢⁽²⁵⁾出雲国熊野、杵築両大神」、並加⁽²⁶⁾「從三位」とあり、その後も再三にわたって神位を陞め、貞観九年（八六七）四月八日丁丑に「從二位勲七等熊野神、……授⁽²⁷⁾正二位」に至った。
- (2) 出雲郡の杵築大社は旧官幣大社で、神名帳に「杵築大社大神」とあり、神位の初見は仁寿元年と、前掲のように熊野大社と同位である。ついで貞観元年（八五九）正月廿七日甲申には「出雲国從三位熊野神、勲八等杵築神正三位」に陞り、同九年四月八日丁丑には「從二位勲八等杵築神並授⁽²⁷⁾正二位」に至っている。結局、両大社の神位の相違は、神位ではともに正二位で、勲等は熊野大社が勲七等で、杵築大社が勲八等であって、その両社の差は勲等で一階の差にすぎない。
- (3) 高草郡の天穗日命神社は神名帳に「天穗日命神社」とあり、小社である。神位の初見は貞観九年（八六七）五月廿一日己未の条に「以⁽²⁸⁾因幡国正三位天穗日命、列⁽²⁹⁾於官社」とあり、以後神位は陞ることがなかった。右の(1)、(2)の大社と、(3)の高草郡の天穗日命神社での神位の相違は正二位と、正三位の差であるが、出雲臣を遠祖とする天穗日命の神位は高く置かれている。一方、出雲国造の祖という武夷鳥命（また天夷鳥命）——記では建比良鳥命——を祀る神社として、宣長は『古事記伝』神代五之巻で「因幡国高草郡天日名鳥命神社、出雲国出雲郡阿麻能比奈等理神社、河内国河内国天夷鳥神社」の三社を挙げているが、神位は天安二年（八五八）二月癸未の条に「在⁽³⁰⁾河内国天夷鳥命神授⁽³¹⁾從五位下」とある一社のみである。この神位を決める基準は外部からは計り難いが、天穗日命神社より下位に置いていることは事実である。高草郡の天日名鳥命神社は鳥取市大畑に鎮座している。

五、むすび

古代の出雲臣は出雲国意宇郡の熊野大社、出雲郡の杵築大社を斎き奉り、仕えてきた氏族である。そして出雲臣の遠祖を祀る神社としては、『出雲国風土記』を勘造した天平五年には、意宇郡屋代郷に天乃夫比命の神名で天穂日命神社が設けられていたと推測することができる。しかし、意宇郡の神社には神名を載せていないので、屋代郷に天穂日命神社設営の願望を載せたに過ぎないのであろうか。また建築の反対の圧力も考えられる。朱雀天皇の時代に、意宇郡を分割して能義郡を新規に設けて、天穂日命神社を鎮座させたのは、意宇郡内の出雲臣の総意の可能性がある。また余程の事情があつてか、後に伯耆国を越えて、因幡国の高草郡に天穂日命神社を設けるなど、出雲国の出雲臣の集団的移住があり、さらに貞観九年五月に高草郡の天穂日命神社は正三位に叙され、一方、同国法美郡の宇倍神社（祭神・竹内宿祢）がその後の元慶二年（八七八）十一月に同じく正三位となる。延喜式内帳では、天穂日命神社は小社、宇倍神社は名神大座、すなわち大社とある（旧国幣中社）。能義郡の天穂日命神社も神名帳では小社である。結果的には、出雲臣の祖神を出雲の両大社に合祀することが許されず、祖神と出雲臣とは両大社を祀る側にあつた。しかし出雲氏には古俗の世界から神に奉仕する工芸・建築を通じて脱却の機会があつた。

風土記の出雲郡の神社に美佐伎社がある。後の日御崎神社で、旧国幣小社である、社を上・下に別つ。上社は素戔鳴尊、下社は天照大神を主神とし、天穂日命は下社に合祀されている。鎮座地は日本海に面し、海の荒れを防ぎ、また対岸の新羅との文化交流も少なからず存在したと考えられる。勾玉・方墳などが候補に挙げられている。出雲氏は現実にも目覚めていた。

京においては平安時代の初期から同祖である出雲連の医学の活躍があり、この点から出雲の史料を研究する学者もいる。しかし、和氣氏と丹波氏が世襲化された医道の発展は望めず、残念乍ら出雲流の医薬史料を蒐集ことは困難のようである。『古

事記』の大国主命の稲羽（幡）シロウサギの素兎の挿話は単なる説話に止らないという。天平十一年の「出雲国大税賑給歴名帳」については、新村拓『日本医療社会史の研究』、松前健『出雲神話』などが大いに参考になった。

筆を擱くに際して、現段階に及ぶ資料を掲げておく。まず明治維新をむかえて、両大社の神位（階）は出雲大社が明治四年（一八七二）五月に官幣大社に、熊野大社が大正五年二月に国幣大社となる。この両大社の神位の相違については、筆者は資料不足で述べるできない。一方、天穂日命については、神社本庁総合研究所研究課に依頼して、出雲国（島根県）を中心に、鳥取・岡山・広島の四件にわたる天穂日命神社の分布を作成して戴いた。左に平成七年六月刊の『全国神社祭祀祭礼総合調査』からの報告である。

アメノホヒノミコト奉祭神社の所在について（全国神社祭祀祭礼総合調査による）

アメノホヒノミコト奉祭神社 境内神社及び本社に祀る神社 その内本社に祀る神社

全国 一〇三一社中 九四五社

島根 六〇社中 五三社

鳥取 二六社中 二六社

岡山 四四社中 四一社

広島 二五社中 二二社

その中で、島根県・鳥取県・岡山県・広島県内で本殿に奉祭されてゐる神社所在地の一覧をお送り致します。又、神名の表記については、約四〇通りあります。（資料参照）

なお、今回は島根県・鳥取県の二県の神社を掲げた。

また、神社の所在地は平成七年現在で、旧県・郡・郷との新旧地名対照表は作成されていない。

天穂日命を本社に祀る神社（島根県・鳥取県）

フルコード	神社名	県名	郡市名	区町村名	鎮座地
7201043	十二所神社	島根県	松江市		大海崎町 268
7201073	八神神社	島根県	松江市		魚瀬町 1175
7202007	日御崎神社	島根県	八束郡	美保関町	笠浦 449
7202020	日御碕神社	島根県	八束郡	島根町	野波 313
7202056	毛杜神社	島根県	八束郡	八雲村	東岩坂 352
7202063	氷川神社	島根県	八束郡	宍道町	宍道 858
7202073	一人女神社	島根県	八束郡	玉湯町	大谷 1329
7204002	日御碕神社	島根県	安来市		月坂町 144
7204026	能義神社	島根県	安来市		能義町 366
7204036	支布佐神社	島根県	安来市		安来町吉佐町 365
7205026	大呂神社	島根県	仁多郡	横田町	大字大呂 139
7205028	王子神社	島根県	仁多郡	横田町	大字竹崎 560
7205033	天満宮	島根県	仁多郡	横田町	大字大馬木 1570
7206056	十九社神社	島根県	大原郡	大東町	大字大西 229
7206071	大森神社	島根県	大原郡	加茂町	木次町大字日登 1345
7206087	日御碕神社	島根県	大原郡	木次町	大字平田 435
7207032	星原神社	島根県	飯石郡	掛合町	大字多根 505
7207042	上神社	島根県	飯石郡	吉田村	大字上山 459
7209001	日御碕神社	島根県	簸川郡	大社町	大字日御碕 455
7209008	阿須伎神社	島根県	簸川郡	大社町	大字揺堪 1473
7209041	鳥屋神社	島根県	簸川郡	斐川町	大字鳥井 815
7209068	田中神社	島根県	簸川郡	佐田町	吉野 324
7210017	玖潭神社	島根県	平田市		久多見町 301
7210043	久多美神社	島根県	平田市		東福町 540
7211043	佐伯神社	島根県	出雲市		東神西沖町 844
7211059	船津神社	島根県	出雲市		船津町 879
7214008	三原八幡宮	島根県	邑智郡	川本町	三原南佐木 234-2
7215011	鶴林山天満宮	島根県	那賀郡	三隅町	井野へ 2-5
7215050	天満宮	島根県	那賀郡	旭町	丸原 1308-2
7216001	山邊神社	島根県	江津市		江津町郷田 113
7216029	岩根神社	島根県	江津市		嘉久志町 2454-1
7218056	河内神社	島根県	美濃郡	匹見町	大字匹見口 687
7218064	劔玉神社	島根県	美濃郡	匹見町	大字落合ホ 157-2
7218069	豊田神社	島根県	益田市		横田町 2873-2
7218087	八幡宮	島根県	益田市		黒周町イ 1043
7218091	八幡宮	島根県	益田市		白上町イ 783
7219002	八幡宮	島根県	益田市		鹿足郡日原町大字滝元 1488
7219010	杵築神社	島根県	益田市		鹿足郡日原町大字枕瀬 272

フルコード	神社名	県名	都市名	区町村名	鎮座地
7219014	大岡神社	島根県	鹿足郡	六日市町	大字広石 960
7219017	劔玉神社	島根県	鹿足郡	柿木村	白谷 1092
7219018	八幡宮	島根県	鹿足郡	津和野町	中曽野 614
7219020	那智神社	島根県	鹿足郡	六日市町	大字朝倉 836-6
7219025	山祇神社	島根県	鹿足郡	六日市町	真田 1267
7219026	劔玉神社	島根県	鹿足郡	六日市町	真田 1329
7219031	八幡宮	島根県	鹿足郡	六日市町	立戸 715-1
7219033	劔玉神社	島根県	鹿足郡	津和野町	大字森村 1328
7219036	荒神社	島根県	鹿足郡	津和野町	大字笹山 97-2
7219042	八幡宮	島根県	鹿足郡	柿木村	大字福川 826
7219045	嚴島神社	島根県	鹿足郡	六日市町	樋口 629
7219048	彌榮神社	島根県	鹿足郡	津和野町	大字後田 67
7219056	春日神社	島根県	鹿足郡	日原町	日原 727-1
7220035	日御碕神社	島根県	隠岐郡	海士町	御波 563
7221056	八王子神社	島根県	隠岐郡	西郷町	大字元屋 718
7101104	日吉神社	鳥取県	鳥取市		布勢 1
7101120	天穂日命神社	鳥取県	鳥取市		福井 361
7102074	中村神社	鳥取県	岩美郡	福部村	大字中 12
7103001	賀茂神社	鳥取県	八頭郡	郡家町	大字宮谷 286
7103008	大江神社	鳥取県	八頭郡	船岡町	大字橋本 734
7103037	湯谷神社	鳥取県	八頭郡	河原町	大字湯谷 208
7103043	都波奈彌神社	鳥取県	八頭郡	河原町	大字和奈見 475
7103048	都波只知上神社	鳥取県	八頭郡	河原町	大字佐貫 511
7103059	隼神社	鳥取県	八頭郡	船岡町	大字見槻中 132
7103062	日下部上神社	鳥取県	八頭郡	八東町	大字日下部 1396
7103164	諏訪神社	鳥取県	八頭郡	智頭町	大字智頭 227
7105003	大原神社	鳥取県	倉吉市		大原 619
7105025	松崎神社	鳥取県	東伯郡	東郷町	大字松崎 566
7105065	田内神社	鳥取県	倉吉市		嚴城 1494
7106055	上長田神社	鳥取県	西伯郡	西伯町	大字下中谷 823
7106071	松尾神社	鳥取県	西伯郡	会見町	田住 225
7106073	天萬神社	鳥取県	西伯郡	会見町	天方 990
7106080	巨勢神社	鳥取県	米子市		八幡 254-3
7106086	小町神社	鳥取県	西伯郡	岸本町	小町 455
7106097	御崎神社	鳥取県	米子市		河岡 630
7106098	北野神社	鳥取県	米子市		赤井手 180
7106154	逢坂八幡神社	鳥取県	西伯郡	中山町	松河原 233
7107025	多里神社	鳥取県	日野郡	日南町	新屋 70
7107038	賀茂神社	鳥取県	日野郡	日野町	本郷 72
7107039	安井神社	鳥取県	日野郡	日野町	津地 423
7107040	嚴島神社	鳥取県	日野郡	日野町	下榎 838

右の四県の調査のうち、今日、天穂日神社と命名している神社は鳥取県の一社にすぎない「〇印」。延喜神名帳に載る、因幡国高草郡の天穂日命神社である。この事実は、渡部義人氏が指摘した通りであるが、敢えて申せば、伯耆国と因幡国との相違だけである。渡部氏の見識には敬意を表したい。波伯吉国から伯耆国になったのは大宝元年である。

この小稿を執筆するに当り、野尻湖ナウマンゾウ博物館学芸員近藤洋一氏、ならびに神社本庁の研究課の方々に、資料の協力を賜わり、茲に厚く御礼を申上げる。なお、千家俊信（一七六四―一八三二）の「天穂日命考」（『百家叢説』第二卷）を参考にした。

〔註〕

〔1〕是歳、命「出雲国造」、(闕)名、修「嚴神之宮」……於宇郡。

〔2〕熊野大社の鎮座地は『出雲国風土記』意宇郡熊野山の条に「郡家正南南一十八里、有「檢檀」也、所謂熊野大神之社坐」とあり、社殿の初期については不明、江戸時代の宝暦十四年(七六四)「熊野大社并「村中諸末社荒神指出帳」には、熊野大社は「上之宮・下之宮」熊野大社ト申也」とあり、方位については「上之宮者、東ノ向也、下之宮ハ巽ノ向也」とある。いわゆる東南の向きを指す(「神道大系」神社編三十六、出雲他)。現存の住所は、島根県八束郡東出雲町に属する。

〔3〕杵築大社の鎮座地は同書の出雲郡出雲御崎山の条に「郡家西北廿八里六丁歩、高三百六十丈、周九十六里一百六十五歩、西下所謂所「造」天下「大神之社坐也」とあり、本殿は当初より南面、現本殿は方二間の南面である。現代の住所は島根県出雲市大社町に属する。

〔4〕『日本書紀』崇神天皇六十年七月の条に、出雲臣の遠祖出雲振根と、実弟の飯入根との争によって、朝廷がその状態を知り、ために出雲臣はこのことを畏れて大神(杵築大社)を祭らず、とある。詳しくは朝廷が吉備津彦を遣わして、飯入根を殺した振根を誅したので、「故「出雲臣等畏」是事、「不祭」大神」とある。

〔5〕有峰堂書店新社、平成六年七月刊。

〔6〕出雲国造の神賀事(詞)を奏した初見は左の元正天皇靈龜二年(七一六)二月丁巳の条にみえる(『続日本紀』)。

〔7〕出雲国々造外正七位上出雲臣果安、齋意奏「神賀事」。神祇大副中臣朝臣人足、以「其詞」奏聞。
天穗日之命「遣而平」平氣申。是以天降遣時^テ、此神^波返事不^レ申。
この祝詞の年代未詳。

〔8〕『出雲国風土記』の勘造は天平五年二月廿日とあり、内田正男氏の麟徳暦(儀鳳暦)の計算では二月己巳朔、三月戊戌朔の小月であり、一方、唐で用いていた大衍暦では、汪曰楨氏による二月己巳朔、三月己亥朔の大月である。陰陽寮の暦博士が暦算を間違えるのは極めて珍らしく、この二月廿日の暦日は大衍暦によった暦日と解すれば問題もない。暦家が一日誤れば、他の月日にも影響が表れて、まずは考えにくい。それよりも、中央官庁に提出する書類は、『令義解』によると、期限は月の廿日が通例である。遠方から中央官庁に提出書類などを届けるには月末を廿日とすることが許されていたと考えられる。正倉院文書(写経目録)に天平五年二月廿日の日付があっても何らの不思議もないと判断すべきであろう。

〔9〕風土記の編纂の制は、その発信者の部署は何処か。太政官からの発信としたのは、延長三年(九二五)十二月十四日付、『類聚符宣抄』にみえる。

太政官符、五畿内七道諸国司
早速勘「進」風土記「事」

如「聞」諸国可「有」風土記文、今被「左大臣宣」^仰「国掌」令「勘」進之、若無「国底」、探「求部内」、尋「問」古老、早速言上者、諸国承知、依「宣行」之、不^レ得「延廻」、符到奉行。

この度の風土記の提出は、和銅六年(七一三)の風土記編纂の制から、実に二二年を経ての、再度の諸国の風土記の提出命令であって、左大臣の經由による太政官の命令伝達であることから、太政官に提出とした。

〔10〕本風土記の各郡の撰者は氏と姓とを載せているが、名前を削除している。副本のためであろうか。意宇郡の撰者は左のごとくである。

郡司	主帳	无位	海臣	出雲臣
少領	從七位上	勳十二等	出雲臣	
主政	外初位上	勳十二等	林臣	
擬主政	无位	出雲臣		

郡司組織の官吏は、大領・少領・主政・主帳の四等官よりなる。大領・少領を郡領とも称し、奏任官。主政・主帳は判任官となす（『令義解』選叙令）とある。掲載の勲位は養老四年（七二〇）神亀元年（七二四）などの蝦夷征討を祈願した神社にも勲位が授けられた証拠であろう。

- （1）嶋根郡は四名中一人（主帳）（2）秋鹿軍は三名中一人もなし、（3）橘郷郡は三名中一人（大領、外従七位下）、（4）出雲郡は四名中一人もなし、（6）飯石郡は三名中一人（少領）、（7）仁多郡は三名中一人（少領）、（8）大原郡は四名中一人もなし。したがって、秋鹿郡・出雲郡・神門郡・大原郡の九郡中四郡には出雲風土記の撰者には出雲臣がいなかったことが分るが、この事実は何を意味するのか、さらに分析が必要である。後日報告つもりである。
- （11）新日本古典文学大系『続日本紀』三、二〇頁注七。日本古典文学大系『出雲国風土記』飯石郡二二五頁注七。
- （12）至天平年中、勘造神帳、中臣専権、任意取捨、有由者、小記皆列、无縁者、大社猶廢、……諸社封税、総入一門。
- （13）池邊彌『和名類聚抄郷里駅名考証』出雲国郷参照。吉川弘文作。
- （14）時、高皇產靈尊乃遣二神、勅大己貴神曰……汝大己貴命應住天日隅宮者、今当供造……柱則高太、即広厚……又当主汝祭祀者、天穗日命是也。
- （15）志賀剛『式内社の研究』第三卷 山城 雄山閣刊。
- （16）出雲臣祖人言。臣等本系、出自天穗日命。其天穗日命十四世孫曰野見宿祢。野見宿祢之後、土師氏人等、或為宿祢、或賜朝臣。臣等同、為二祖之後、独漏均養之仁。伏望与彼宿祢之族、同預改姓之例。於是賜姓宿祢。
- （17）其大領、少領、才用同者、先取国造、謂取見為国造者。即神祇令、国造出馬一疋。是也。
- （18）太政官符
- （19）應任出雲国意字郡大領事

- 右被二納言從三位神王宣称。奉勅。昔者国造、郡領、職員有別。……
- 太政官符
- 禁出雲国造託神事多娶百姓女子為妾事

右被「右大臣宣」称。奉勅今聞。承前国造兼「帶神主」、新任之日即棄「嫡妻」、仍多娶「百姓女子」、号为「神宮采女」、便娶為妾……自今以後不得更然、……

- （20）『文德天皇実録』文德天皇の条。

- （21）『三代実録』清和天皇の条。

- （22）中島利一郎「我が上代文化の東洋言語学的背景」『東洋言語の建設』七七―七八頁。

- （23）松村武雄『日本神話の研究』第三卷 第十二章大國主の神話 第五節この神話の細部の考察。

- （24）服部敏良『平安時代医学の研究』第四章医家列伝。一三五頁。

- （25）註（20）と同じ。

- （26）註（21）と同じ。

- （27）註（20）と同じ。

〔補足〕

筆者が『出雲国風土記』の研究で一番希望しているのは、多数の神社の社殿の地理上の方位である。新羅を意識しての実現を切に願う次第である。天文学・天文史で有名な神田茂氏（故人）は古墳の方位について資料を蒐集していたが、発表に至らなかった。

（了）